

短 報

2014年度 聖路加国際大学教育改革推進事業 「多言語・多文化対応力育成プロジェクト」報告

井上 麻未¹⁾ ハフマン・ジェフリー¹⁾ 中島 薫²⁾ 瓜生田真理²⁾

Report on the “Multilingual / Multicultural Awareness Project” Implemented under the 2014 St. Luke’s International University Educational Improvement Project

Mami INOUE, MA¹⁾ Jeffrey HUFFMAN, MEd¹⁾
Kaoru NAKAJIMA²⁾ Mari URIUDA²⁾

[Abstract]

In this article, we describe the “Multilingual/Multicultural Awareness Project,” which was selected as part of the 2014 St. Luke’s International University (SLIU) Educational Improvement Project, and report on its implementation.

This program was planned and implemented by the SLIU English faculty and International Affairs Department, with the goal of cultivating the multilingual and multicultural awareness of the students, staff, and faculty at SLIU. The program was conducted from December 2014 through March 2015, and it consisted of 6 seminars by experts in a variety of fields as well as 2 coaching workshops. With a total of 120 participants, the program provided a unique space where participants could learn about a wide variety of languages and cultures. Despite the short term of the project, the students, staff, and faculty who participated displayed a high level of motivation and interest toward learning about different languages and cultures.

[Key words] multilingual / multicultural awareness, Olympics-designated hospital, medical English, English proficiency examination, coaching

[要 旨]

本稿では2014年度聖路加国際大学教育改革推進事業で採択された「多言語・多文化対応力育成プロジェクト」について、事業概要とプロジェクトの実施内容を報告する。

本事業は、本学の学生、教職員の多言語・多文化対応力の育成を目的として、英語教員と国際部が協働で企画、実施したものである。2014年12月から2015年3月までのプロジェクト期間に6つの有識者セミナーと2回のコーチングワークショップを実施した。本事業には延べ約120名の学生、教職員の参加があり、本学独自の開かれた多言語・多文化学習のための学びの場を広く提供することができた。短期間のプロジェクトであったが、本事業を通して、本学学生、教職員の多言語・多文化学習に対する意欲や関心の高さが明らかになった。

[キーワードズ] 多言語・多文化対応力, オリンピック病院, 医療英語, 英語の資格・検定試験, コーチング

1) 聖路加国際大学看護学部 基盤領域(英語) St. Luke’s International University, Social Sciences & Humanities / Fundamentals of Research (English)
2) 聖路加国際大学国際部 St. Luke’s International University, International Affairs

I. はじめに

2014年4月に聖路加看護大学と聖路加国際病院が一体化し聖路加国際大学となった。聖路加国際大学のさらなる「国際の具現化」に向け、学生、教職員の多言語・多文化対応力の育成を目的として、本学の英語教員と国際部が協働で「多言語・多文化対応力育成プロジェクト」を計画した。

聖路加国際病院は、2020年東京オリンピック・パラリンピック開催時のオリンピック病院に選定された。国際的な医療施設評価認証機関であるJCIの認証を取得し、2015年国際病院連盟賞最高位賞を受賞した聖路加国際病院は、選手村からの距離が近く、東京オリンピック・パラリンピック開催時に多言語対応が可能で安心して受診できる医療機関として期待され、世界中から非常に多くの来訪者を迎えると予想される。

2020年には保健医療の第一線で活躍することになる本学の現学部生、大学院生、特に聖路加国際病院のようなオリンピック病院の看護師には実践的な語学力と異文化コミュニケーション能力が必要とされるため、本事業では本学の学生を対象に多言語・多文化対応力の育成を目的とする幅広いテーマでのセミナー実施を目指した。具体的には、本事業により授業時間外に多言語学習の機会、多文化に出会う学びの場、英語の検定試験対策、語学学習法の指導等、多様な選択肢を提供することで、学生の多言語・多文化の学びへの動機付けの一助となることを目標とした。

2014年9月末に本事業に応募、10月に採択決定、同年12月より2015年3月までを実施期間とする限られた期間での事業であったが、期間中に6つのセミナーと2回のワークショップを実施し、多くの参加者を得ることができた。

本稿では、教育改革推進事業として本学の英語教員と国際部が企画、実施した「多言語・多文化対応力育成プロジェクト」の概要とプロジェクトの実施内容を報告する。

II. プロジェクトの内容

1. 有識者のセミナー

『「いつものお昼休み」を、「好奇心の入口」に変えてみませんか?』、「Ignite Your Curiosity」をキャッチフレーズとし、本学学生、教職員を対象として下記の有識者セミナーを実施した。

第一回目は、2014年12月12日（金）にキックオフセミナーとして本学卒業生の石井苗子氏（女優・ヘルスケアカウンセラー）を講師に招き、大学本館402講義室にて「失敗を恐れず挑戦してゆくおもしろさ」というタイトル

のセミナーを実施した。プロジェクト開始にあたり井部俊子学長より参加者への応援メッセージを頂戴し、ランチタイムの和やかな雰囲気の中初回セミナーがスタートした。

石井氏は、聖路加国際大学とNPO法人日本臨床研究支援ユニットとの共同プロジェクトとして「きぼうときずな」（東日本大震災被災住民支援プロジェクト）のプロジェクトリーダーでもあり、セミナー冒頭では、プロジェクトを通して本学がいかに現地のニーズに即したかたちで福島県に看護師や保健師を長期にわたって継続的に派遣し、人びとの心と体の健康を取り戻すことを支援してきたかについて紹介があった。

本学卒業生でもある石井氏より、先輩として本学学生へあたたかなエールが贈られ、同氏の多彩な経験（留学・同時通訳・キャスター・女優業）の中から、学士編入生として複眼的な視点を持って入学された氏の本学在学中の講義や実習での学びの体験に始まり、留学先大学でのシェイクスピア劇での楽しいエピソードを含め英語を会得する経緯などが披露された。学生にとって身近な話題に引きつけて、多文化の中で失敗を恐れず挑戦していくことのおもしろさや意義について、石井氏の美しい英語も交えながら伝えていただき、大盛況の中キックオフセミナーが終了した。

第二回目セミナーは「スペイン語の魅力：スペイン語を公用語とする国と地域の言葉と文化」と題して森口舞氏を講師に招き、2015年1月8日（木）に大学本館403講義室で開催した。本セミナーのために、「人生最強のパートナーがスペイン人、人生最良の友人が南米出身、人生最高の仕事にメキシコで出会う……ということがあるに起こるかもしれません」という広報文のチラシを用意し参加を呼びかけた。

本学では2015年より新規科目として「スペイン語」が教養科目に加わり、現在森口氏が担当されている。しかし、「スペイン語」は2015年以前は本学では開講されていなかった第二外国語科目であったため、参加者はスペイン語の学習経験がない学生と想定してセミナー準備を行った。

本セミナーでは、スペイン語とスペイン語圏を知るところをテーマとし、まずはスペイン語の音や文字の特徴の簡単な紹介、そして世界の言語の中でもとりわけ多くの国や地域で話されているスペイン語を公用語とするすべての国をダイジェストでビデオによる紹介をした。加えて、メキシコの看護学生二人への森口先生のインタビューにより実際にスペイン語の音に触れながら、それぞれの看護学についての考えを聞くことができた。医療の発展で知られるキューバの医療事情の紹介もあり、スペイン語とスペイン語圏、そしてその医療事情に触れる機会を得た。

第三回目セミナーは2015年1月13日(火)に大学本館402講義室にて、文化人類学者の若林大我氏を講師に「たくさんの窓を持つ：「賢明」に生きるための文化人類学」というタイトルのセミナーを開催した。現代社会において文化人類学が果たす役割とはどのようなものか、グローバル化が急速に進む今日、異文化間の対話や相互理解の重要性の観点から講義いただいた。

文化人類学は2015年4月より新たに学部科目に加わった科目である。そこで、本セミナーは、文化人類学とは何か、文化人類学の歴史、そして文化人類学とはどのような特徴を持つ学問かということからスタートした。セミナーでは、文化人類学が、文化を手掛かりとして自己と他者とを比較することで、「人間とは何か」という壮大な問いに答えることを目指す学問分野であること、文化人類学の営みは、物珍しい価値観や習慣に触れるという単なる好事家的な興味とは異なり、「我々」と「彼ら」との差異の認識、更にそうした認識を踏まえた普遍性の追求の過程で、「我々」と「彼ら」との峻別そのものにも疑いの眼差しを向けるものであること、あらゆる偏見や差別の根底には、他者を一方的にある類型へと“閉じ込める”態度があるが、具体的な事例に基づいてそのような類型化を疑問視することこそ、文化人類学の基本姿勢と言えることについて説明があった。参加者は、他者を狭い枠に閉じこめて短絡的に理解せず、自らもまた狭い枠に囚われないためにも、この学問の果たす役割は決して小さくないことを学ぶ機会を得た。

また、文化人類学の特徴の中で最も重要な特徴のひとつ、研究対象である地域に長期間滞在し、現地の文化や社会生活に参与して観察するフィールドワークについて、本セミナーでは若林氏が専門とする南米、アンデス高地における牧畜文化に関するフィールドワークの経験と研究についての貴重な話を伺うことができた。同氏は本年4月より本学で「文化人類学」を担当されており、壮大な研究について引き続き拝聴する機会を科目履修学生が得ている。

2015年3月5日(木)には大学本館402講義室にて、「多言語を学ぶ×多文化から学ぶ=自分パワーアップ計画2015~春期特別企画!3本立てプラス1セミナー」と題して、3つのセミナーと3人の講師とのランチディスカッションを行った。具体的には、1)医療英語の学びの入り口となるセミナー、2)海外留学を考えている学生に必須のTOEFL(トフル)、IELTS(アイエルツ)などの英語の検定試験の対策講座、3)韓中日英の4か国語に通じるマルチリンガルな研究者から学ぶ簡単な韓中フレーズや多様な文化についての学び、そして参加者と3人の講師との1時間のランチディスカッションである。

貝原加珠氏による「英語での医療コミュニケーション初めの一步」では、病院の中で日常的に頻繁に使われる

診療科などの基本的な語彙を確認した。医学用語の習得法として、医学用語のなりたちと構成のルールについてわかりやすく教えてもらい知識を確認することで、参加者は語彙を増やしていく方法を身につけることができた。さらに、同時通訳の訓練法として使われているシャドーイングという、リスニングとスピーキングの力を効果的に高めるためのトレーニング法の紹介があり、オンライン教材を使って、実際に全員で声を出してシャドーイングの練習をした。難しいイメージの医療英語に親しむ工夫満載のセミナーに参加者の笑顔がほころび、シャドーイングでは教室に参加者の快活な声が響いた。このトレーニング法を自宅でも実践できるように、無料ながら質の高い教材とその有効な活用法を実際に教えてもらうことで、楽しみながら英語のリスニングとスピーキングの練習を毎日続けられるという実感を参加者に持ってもらうことができたセミナーであった。

次に、井上が「海外での学びを考えているあなたへ：始めましょう英語試験対策」で、海外留学の際に受験が必要となる英語の検定試験のなかで、最も多くの国の教育機関で利用されているTOEFLとIELTSに焦点を絞り、2つの試験の概要と比較、そして実際の試験問題を使った演習と問題解説を行った。

海外の大学あるいは大学院に正規留学する時には必ず英語の検定試験のスコアを提出し、英語能力を証明することが求められる。自分が学びたい海外の大学、大学院の学科に合格するためには、どの試験を選ぶかということが非常に重要である。TOEFL、IELTSも共に英語の4技能を測定する試験であるが、実際はそれぞれ異なる特徴を持つことから、自分に適した英語検定試験を的確に選び、受験準備を進めることが留学への扉を開く鍵となる。日本では、大学、大学院留学のための英語検定試験としてTOEFLがよく知られているが、世界的にはIELTSが英語能力証明テストとして使用できる国や教育機関の範囲が一番広い試験であること、現在、英国への留学には一般的にTOEFLは使えないため、留学希望先に基づく英語の検定試験を選択することの重要性について説明を行った。

本セミナーでは、TOEFLとIELTSのすべてのセクションのポイントを説明し、実際の問題に一通り目を通してもらった。特に、TOEFLとIELTSのリスニング問題の違いを理解するため、参加者は実際にそれぞれの問題に挑戦した。

TOEFLのリーディング、リスニングにおいては読解力、リスニング能力もさることながら、生物学、地理学、天体学、科学、環境、歴史、文学、建築など一般的な教養が必要な問題となっている。さらにスピーキングではリスニングの内容をもとに解答する問題が全体の問題のうち3分の2、ライティングではリスニングの問題をも

とに解答する問題が全体の問題の半数であり、4技能の中でも特にリスニング能力が重要となる。

さらに、特に日本人受験者が苦手とするスピーキングの試験も TOEFL と IELTS では形式が全く異なる。TOEFL のスピーキングテストでは、対話者はおらず受験者がコンピューターに向けて話し続けなければならない。一方、IELTS では試験官と実際に一対一で会話をすることができる。TOEFL と IELTS のスピーキングのサンプル問題を提示し、自分はどちらの形式の試験に向いているか考えてもらった。どちらの試験においても、一人では練習が難しいスピーキングセクションであるが、誰でも自由に使うことができるオンライン教材を紹介し、スピーキングテストのための自主学習法を紹介した。

次に、英語からアジアの言語へとテーマを変え、崔蘭英氏より「ハングル、陰陽五行、そして漢方」と題するセミナーを行った。導入として、本学の第二外国語科目にはない「韓国語」のハングルについて歴史的な説明があった。ハングルは1446年に創製、公布されてから400年余りの間、「諺文」としてその用途が限定されており、知識人の〈書きことば〉として、漢文が使用されていたため、ハングルはその下位的存在であった。19世紀末にナショナリズムの時代を迎えると、朝鮮独自の固有文字として「国文」と位置付けられ、漢文と混用した形で市民権を得られるようになった。20世紀初めに周時経（ちゅうしぎょん）によって「大いなる文字」という意味で「한글（ハングル）」と命名されると、その呼称は次第に定着してきた、との歴史的背景について学びを得た。セミナーではハングルの読み方についての説明も受け、実際に参加者が声を出してハングルを読む経験ができた。

さらに漢方医学における陰陽五行説との関連性まで話は進み、韓国語への興味がいっそうかきたてられ、「ハングル、陰陽五行、そして漢方」の続編を期待しながらセミナーが終了した。

ランチディスカッションでは、参加者の中に海外留学を間近に控えた学生、すでにアメリカやアジアなど海外の国々への留学経験者のある学生が複数おり、3人の講師と全員でテーブルを囲みながら、各自の異文化体験やこれまでの語学学習の困難あるいは楽しさ、医療英語の学び方、将来の夢などについて、自由なディスカッションの時間を1時間あまり持つことができた。貝原先生、崔先生のフィードバック、参加者の豊かな感性と好奇心が素晴らしく、「多言語を学ぶ×多文化から学ぶ＝自分パワーアップ計画2015～春期特別企画！」というセミナータイトル通りの充実のセミナーであった。

2. 学生へのコーチングの実施

日本の様々な地域で、あるいは世界各地で活躍している上で、まず「自分を知り」、その上で他者との相互理解

について考えていくことが重要である。自らの能力と可能性を十分に引き出して、将来的に多文化環境の中でより円滑に仕事ができるよう、本学学生、大学院生を対象として下記のコーチングワークショップを実施した。

2014年12月19日（金）と2015年3月25日（水）の2回にわたって、竹内春海氏を講師に招き、「あなたの知らない自分を知る」というタイトルでワークショップを開催した。竹内氏は多文化、多民族社会の中で育った自らの経験と、大手広告代理店で外資系得意先担当として広告業界で活躍された経験から、広告手法を使い、自分でも気がつかない「自分の資質」や「現状」を見ることができる、「自分パズル®」というユニークなツールを用いたコーチングを行っている。

本事業でコーチングを実施するにあたり、「視覚表現」や「文章表現」など学生にはなじみの薄い広告手法のものをあえて選び、ワークショップを通して、一種の「異文化」を実際に体験してもらえよう企画した。学生への参加呼びかけは、竹内先生の以下の広報文で行った：「意外と知らないのが自分の魅力。なぜ？あまりに、当たり前前のことで魅力とだと思っていなかったり、私はこんな人、そんな思い込みがあったり。まずは、自分のことを知り、周りの人のことを知る。様々な考えがあることに気づきます。これから様々な文化・多様性と接する、その身近な第一歩にしてみませんか？楽しみながら、気づけば世界に1つの『自分パズル®』ができています、見ればわかる！そんなユニークなワークショップです。」

1回目は学部生9名、2回目は大学院生8名の参加があり、それぞれ3時間のワークショップは、セミナーの説明、創作活動、各自のプレゼンテーション、先生からのフィードバックという内容で実施した。

「自分を知る」こともさることながら、周りの人の「自分パズル®」を見てプレゼンテーションを聞くことで、周りの人たちが実に様々な考えと、驚くようなアイデアを持っていることを知り、自分だけでなく他者の中にある多層的な世界への気づきがあったというコメントが学



写真1 第1回コーチングワークショップにて「自分パズル®」作成中の様子

部生に多く見られた。

Ⅲ. おわりに

本事業は、本学学生、教職員の多言語・多文化学習に対する意欲や関心を高めるとともに、各自が聖路加国際大学の一員としていかに異文化対応力を高め、社会に貢献ができるかを考え、行動する契機となるキックオフ的な役割を果たすことができたと考える。2014年12月から2015年3月までの短いプロジェクト期間にもかかわらず、延べ参加者数が約120名と多かったことから、本学の学生、教職員が多言語学習の機会、多文化に出会う学びの場に関心を寄せていることが明らかとなった。

「語学力」という観点では、本学では2015年以前には第二外国語科目として受講の機会がなかったスペイン語・韓国語について、簡単なフレーズなどの基礎的な言語知識や学習の仕方と学習ツールの紹介、またそれらの言語圏の文化・習慣について専門家の講演を通し広く学ぶ機会を提供したことで、参加者の学習意欲と知的好奇心を喚起することができたと考える。英語については、看護・医療英語や英語の検定資試験対策の情報を詳細に提供したことで、海外の大学や、大学院に正規留学を目指す学生への動機付けの一助になればと願う。

「異文化理解」という観点では、コーチングワークショップを通して自らを知ることでアイデンティティの再確認を行い、「セルフコア(軸)」を持つことの大切さと共に、自分の「あたりまえ」は他者の「あたりまえ」とは限らないことを学んだ。本ワークショップでは、より深い相互理解の視点を強化し、「異文化理解・共生」という課題に取り組むための基本的な姿勢の養成を目指した。

語学能力の向上と異文化理解の促進は、多言語・多文化対応力の育成のために特に重要な要素である。本事業を通じて参加者が異なる言語や文化に触れる機会を得て、その違いや素晴らしさを実際に知ったこと、また未知の世界への興味を深めてくれたことから、今後さらに各自が様々なかたちでその視野を広げていくことが可能であろう。

これらの一連の取り組みは、2014年度に留まらず2020年東京オリンピック・パラリンピックまで継続していく予定である。現在、本学では複数の言語・文化を横断的に学ぶカリキュラムはないため、本取り組みが提案する多言語・多文化セミナーのような学生すべてに開かれた学びの場の活用により、本学学生の国際対応力の育成が期待できると考える。

参考文献

- 1) Cambridge ESOL. (2009). Cambridge IELTS 7 Self-study Pack : Examination Papers from University of Cambridge ESOL Examinations.
- 2) Educational Testing Service. (2012). Official TOEFL iBT Tests with Audio.
- 3) Loughed, Lin. (2013). Barron's IELTS. International English Language Testing System.
- 4) 石井苗子. (2012). 保健師のための被災支援〈保健事例〉. 母子保健事業団.
- 5) 高橋覚二. (2009) ¿Qué te pasa?: 初級スペイン語, 看護・医療系語彙を中心に. 朝日出版社.
- 6) 若林大我. (2014). アンデス高地にどう暮らすか— 牧畜を通じて見る先住民社会. 風響社.